

## 2. 事 例

### 事 例 1 教師の予測とのズレから推測されるA男の「わかる」

#### (1) 対象生徒のプロフィール

高等部2年生の男子。本校には小学部1年から在籍している。自閉的傾向がある。日常生活場面での簡単な指示や聞き慣れた言葉は行動化できるが、初めての指示や少し難しい言葉になると意味がわからず混乱するようである。そういう時には「～むにゃむにゃ～です」と言ったり、とりあえず言われた中の聞き取れた単語から推測したりして行動しようとしている。

日常の決まった活動には順応していて自分で進めていくことができるが、休み時間などにはブラブラしていたり、独り言を言ったりと教師から見ると無為な時間を過ごしているようにも思われる。調子の悪い時には、手のひらをこすって出した垢を親指と中指でこねていたり、過去の叱責の言葉を繰り返したり、童謡のワンフレーズを繰り返して歌ったりしている。こういった行動をとることで、精神的にも安定しようとしているように見える。また何人かの女の子にこだわってつきまとう行為があり、それを誰かに阻止されると泣き声が出て、高じると「ぎゃあ」という奇声が出る。表面的には大きな問題行動はないが、本当に好きなことがあるのか、学校で興味を示すことがあるのか、授業には形だけ参加しているのではないかなど、本来は大きな問題を抱えている生徒であると思われる。

エピソード：今年度作業（製菓班）の時間の初めの頃に、「A君、クッキーの生地を冷凍庫にかたづけて」と言葉で指示を出した。A男はいつまでも動けない。もう一回同じ指示を出したらクッキーの生地をもってうろうろしだした。教師側の言葉かけがよくなかったと思い、A男のそばへ行きクッキーの生地を持った手を一緒にとって冷凍庫を開け「生地は冷凍庫に入れてね」と伝え、一人でもやらせてみた。後は一人でできるだろうとその場を離れて他の仕事をしていると、残っていた10本ほどの生地はずっと置かれたままであった。結局、全部かたづけてもらうまで「これ、次これ」と1本につき1回ずつの指示を要した。A男は「冷凍庫」も「クッキー生地」も知っているが、慣れない場所で・したことのない行動を・言葉によってするように言われたのである。そういった状況での言葉のみによる指示は、A男にとって混乱を招くことのようにだった。A男に新しいことを教える時は、見せて・一緒にやって・一人でさせて・それを何回も繰り返すことが必要であることが「わかった」。

#### (2) 課題選択の傾向

課題を提示する教師の中にA男の好きな先生がいる時には、ほとんどの場合その教師の課題を選んでいる。今年度第1回目の挑戦学習ではA男の好きな教師は提示していなかったが、その中で課題「麦茶をわかす」を選ぶことができた。A男はお茶が好きでよく飲んでおり、冬場でも水筒を持ってくるほどである。このことから、提示する教師への気

持ちが同等ならば、課題の中から自分の好きなことや興味のあること、生活に関連することを選んでいることがわかる。

### (3) 練習の様子と手立て

#### ①課題「麦茶をわかす」

##### 学習環境を整える

この課題では、表Ⅳ-1の手順で麦茶をわかした。A男はその日によって手順の所々でできたりできなかつたりしていたが、その「できない」レベルはまちまちだった。手順5で麦茶のパックをやかんではなく、やかんを冷やすタライに入れようとしたり、手順9でできあがった麦茶を水筒ではなく別のやかんに入れようとしたりと、教師が理由をつかめないところで、間違えたりわからなくなるようだった。いろいろ考えた結果、A男にとって道具の位置やその数といった「麦茶をわかす」環境が、毎日変わっているのかもしれないと思われた。そこで、

やかん・麦茶のパック・水筒・ふきん等の置く場所を変えないようにし、必要でないと思われる雑多な物は目につかないようにした。そうするとA男のする間違いが、手順のミスやうっかりし忘れるミスといった、教師にも理由がわかるものになってきた。

##### 手順を写真カードにして視覚的にわかる工夫をする

実際にはこの課題の時には行わなかったが、A男の特性を考えると、例えば手順などをカード化して自分で順番を目で見てわかるようにすれば、より理解が深まったのではないかと反省した。

#### ②課題「ボタンをつける」・「指編み」

第2回目の課題「ボタンをつける」と第3回目の課題「指編み」はどちらもA男の好きな教師が提示した課題であった。担当の教師にA男の特性を伝えたと、言葉による説明はしないで、とにかく目の前でやってみせることでボタンつけも指編みも練習を重ねたとのことである。発表ではどちらの課題でもパーフェクト合格の評価を受けた。この2つの課題は、前述の「麦茶をわかす」よりも以下の点でA男にとって教材としてわかりやすかったと思われる。

##### 視野が限定される

「ボタンをつける」も「指編み」も共に手芸的な課題であり、机の上といった狭い視野の中で行われたため、余計な刺激が目に入らずA男は非常に集中して練習することができたようであった。

##### 手順の相互に関連性がある

表Ⅳ-1 「麦茶をわかす」手順

1. やかんに水を入れる
2. ガス台にのせて火をつける
3. 沸騰したことに気づく
4. ガスを止めて火を消す
5. ふたをとって麦茶のパックを入れる
6. 弱火にしてタイマーを5分にセットする
7. タイマーがなったら火を止める
8. 水につけて冷やす（水の準備は教師）
9. 冷えたらお茶を水筒に入れる
10. 麦茶のパックを捨てやかんをゆすぐ

「ボタンをつける」手順は、針に糸を通す→玉結びをする→ボタンを布につける→玉止めをする→糸を切る、といったものである。これらの手順は一つ抜かすと次の活動に支障をきたすため、「麦茶をわかす」時の手順よりも意味がはっきりしてわかりやすかったと思われる。

#### 同じ手順（動作）を繰り返す

「指編み」は枠に糸を張り下の糸を上糸に掛けていく動作の繰り返しによって、作品ができあがっていく。これはA男にとって「ボタンをつける」課題よりさらに「わかりやすい」ものであり、練習の時から一人でどんどん進めていくことができた。課題発表の後も学級で朝自習として行っており、将来のA男の余暇活動につながる趣味の一つとして定着してほしいと考えている。

#### (4) 考察

上記の挑戦学習の練習の様子から、A男のような生徒にとっての「わかる」ための手立てを考えてみた。

#### 刺激の処理の仕方の傾向をつかむ

A男は刺激を聴覚よりも視覚的に処理する方が得意であることが推測される。その視覚的な処理も、視野の範囲とか刺激の内容や数によって処理しきれないことがあるようである。例えば私たちが「麦茶をわかす」時には、台所でその活動に必要な道具を視野の中で瞬時に判別し選び出して使用しているが、A男は目に入った物をそのまますべて、必要性といった意味において同レベルで捉えているのではないかと思われる。

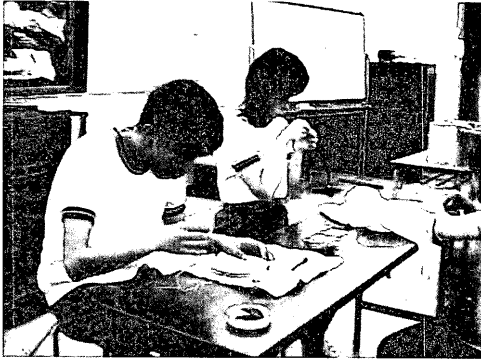
#### 活動の環境を整理して、できる状況をつくる

そのため、活動に必要な物はあるだけ排除することや、必要な物は決まった場所に置くなどの環境の整理が必要である。作業の時間に、A男が洗った食器をかたづける仕事をしている最中、友だちが汚れた食器をその横に置いたことがあった。A男は洗った食器と一緒に汚れたものまでかたづけようとしていた。これをA男が「できない」と捉えるか、「わかる環境の整備が不十分」だったと捉えるかによって、支援する姿勢も違ってくる。生徒が「できる」「わかる」ための状況づくりに努めていきたい。

#### 関連性のある手順で練習する

A男が「できる」ようになるためには、その手順を説明するより、とにかく繰り返し行う方法のほうが有効だと思ってきた。今回の課題「ボタンをつける」で見られたように、前段階の手順を踏まないと次の手順に続かない場合には、A男のミスはぐっと少なくなった。反対に、課題「麦茶をわかす」では安全性等を考えて配慮事項もいくつか盛り込んだ手順となったため、A男にはわからないものになってしまったのではないだろうか。手順が厳選され、その関連性が明確なものになると、A男自身は意識していないかもしれないが、手順自体が「わかる」のだと思われる。

A男の特性がわかっても、日常の学校生活ではつい彼に対して「これ」とか「あれ」といった指示語を使ってしまうことがある。また、これぐらいはわかっているはずといった



集中してボタンをつけるA男

教師の一方的な思いこみが先走って、実は意味が伝わっていなかったということもある。しかしそういった教師の思いこみと実際のA男の行動のズレを「どうしてここで彼はこのような行動をとったのか」というふうに考えることで、その子の世界の見え方・捉え方を推測できることがある。さらに「どうしたら伝わるのか、できるのか」につなげていくことで、その子の「わかり」が見えてくることもあることを実感している。

(下野令子)